

## 【論文（答案）を書くときの基本事項】

論文（答案）を書くときの基本事項として以下の8項目について解説します。

1. 1文は72文字以内を目安に書く
2. 誤字を書かない
3. 用字用語を統一して書く
4. 文体は常体を使う
5. 用言で終わる文を書く（体言止めの文を書かない）
6. 指示に従って文字を書く
7. 「以上」と書く
8. 答案用紙に受験番号を書く

### 1. 1文は72文字以内を目安に書く

1文は、答案用紙での3行以内、すなわち、72文字（24文字×3行）以内を目安に書いてください。例えば、100文字を超えるような長い文では解答が明確に伝わらないことがあります。

### 2. 誤字を書かない

解答を書いているとき、漢字が出てこないときには「ひらがな」や「カタカナ」で書いてください。うろ覚えで書くと誤字を書く可能性があります。ひらがなやカタカナは誤字ではありません。しかし、「ひらがなあるいはカタカナで書く」という書き方も程度問題です。論文（答案）の中に、ひらがなあるいはカタカナで書いてある単語が複数ある論文（答案）も印象が悪いです。「この受験生が漢字も書けないのか」と思われます。

### 3. 用字用語を統一して書く

用字用語を統一して論文（答案）を書いてください。例えば、論文（答案）の中に「情報システムの安全対策の向上」と「情報システムのセキュリティ対策の向上」の2つが書いてあると、試験官は頭の中が混乱します。『安全対策』と『セキュリティ対策』を同じ意味で使っているのか、あるいは、これらを違う意味で使っているのかと思うからです。

#### 4. 文体は常体を使う

文体は、「だ」「である」(常体)を使ってください。常体で書くと、言い切る語尾になり文に説得力が出ます。

■課題は、津波発生時の避難方法を考えることである(常体)。

■課題は、津波発生時の避難方法を考えることです(敬体)。

#### 5. 用言で終わる文を書く(体言止めの文を書かない)

用言とは、動詞、形容詞、形容動詞のことです。体言とは、名詞や代名詞のことです。つまり、体言止めの文とは文の最後が名詞や代名詞で終わる文のことです。例えば以下のような文です。

■課題は人材育成。

体言止めで書くと歯切れのよい文が書けます。しかし、論文(答案)では用言で終わる文を書いてください。公式な文は、用言で終わる文で書くからです。

■課題は人材育成である。

ただし、箇条書きの場合には体言止めで書いても構いません。

- ①工事費の削減
- ②工事に伴う騒音や振動の低減
- ③転落事故防止などの工事の安全確保

#### 6. 指示に従って文字を書く

「令和5年度 技術士第二次試験 受験申込み案内」に以下のことが書いてあります。これらの指示に従ってマス目の中に文字を書いてください。

- ①原則として1マス1文字として解答してください。(図表を用いて解答する場合を含む。)
- ②英字・数字は1マス2文字を目安としてください。(図表を用いて解答する場合を含む。)
- ③マスを無視して解答した場合は、採点対象から除外する場合があります。

## 7. 「以上」と書く

論文（答案）の最後には「以上」と書いてください。「以上」の有無と採点結果は無関係です。しかし、「論文（答案）はここで終わり」ということを試験官に伝えるためにも「以上」と書いてください。

ン	サ	ー	，	ロ	ボ	ッ	ト	，	I	C	T	あ	る	い	は	無	人	航	空	機	（	ド	ロ	
ー	ン	）	な	ど	の	新	技	術	を	積	極	的	に	活	用	す	る	。						
			こ	れ	ら	の	新	技	術	は	，	安	全	性	や	信	頼	性	が	確	保	さ	れ	て
			い	な	い	た	め	，	現	状	で	は	ま	だ	試	行	的	な	段	階	で	あ	る	。
			今	後	，	点	検	・	診	断	対	象	と	な	る	道	路	構	造	物	が	増	え	る
			こ	と	か	ら	，	新	技	術	の	導	入	は	不	可	欠	で	あ	る	。	そ	の	た
			め	，	新	技	術	を	積	極	的	に	活	用	し	こ	の	技	術	を	確	立	す	る
			必	要	が	あ	る	。	以	上														

●裏面は使用しないで下さい。●裏面に記載された解答は無効とします。

24字×25字

## 8. 答案用紙に受験番号を書く

試験問題を読む前に答案用紙に受験番号を必ず書いてください。「自分は、受験番号を書き忘れることなど絶対にない」と決め付けしないでください。「試験問題を読む前に答案用紙に受験番号を必ず書くこと」を頭の中に入れて試験に臨んでください。受験番号を書き忘れると失格（不合格）です。

以 上